

想い出の地——今昔 7
 はじめに 39
 調査団派遣の経緯 43

一、シンガポール(昭南) 旧イギリス領

シンガポールへ出発 47
 満鉄派遣調査団員名簿 51
 昭南島と軍政 57
 昭南軍政監部と調査室 63
 昭南占領直後の華僑対策 73
 ——華僑虐殺事件と献金問題—— 86
 シンガポール日本人墓地とひのもと地蔵尊 86

二、スマトラ島 旧オランダ領

スマトラ島と軍政監部 93
 南のふるさと、スマトラを訪ねて 112
 メダン日本人墓地 123
 ——戦犯二十五士の碑と独立戦争参加戦没者の碑—— 123

特別寄稿

スマトラの思い出——民心把握と独立問題—— 126
 元軍政監部調査室長 平野 栄

三、ジャワ島 旧オランダ領

ジャワ出張 163

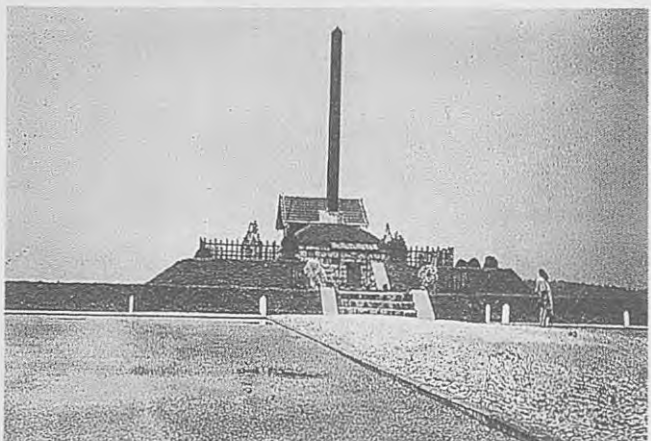
四、帰還

懐しの故国へ 175

ともに今はない



昭南神社 景勝の地マクリッチ水源地の西端に建立されていた。
日本から運んだ総檜造り



昭南忠霊塔 かつての激戦地ブキテマの丘に建立されていた

付録資料

南方占領地行政実施要領と軍政関係要員
スマトラ軍政実施要領

191 186

年表（太平洋戦争開戦からインドネシア独立まで）

184

おわりに

181



元 昭南特別市庁舎

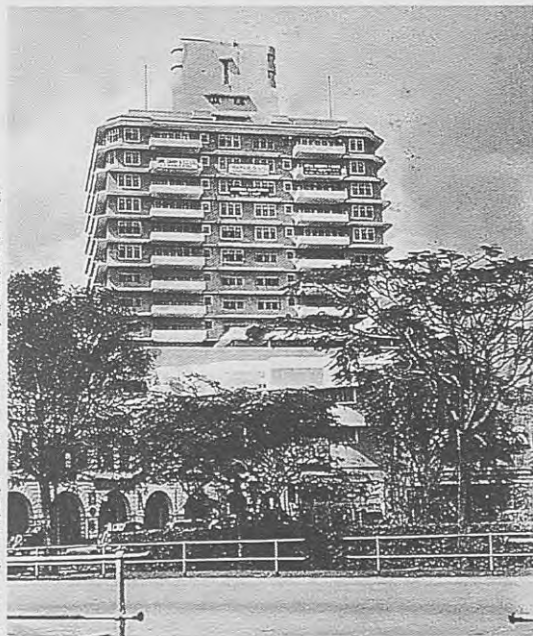


"コブラ・マスター"。印度人の笛で踊るコブラ。通勤の途上で毎日見た風景

勤務を終え市庁舎前広場にて
左より、本間、吉田、川島



元 昭南軍政監部。現在は中央郵便局



元 大東亜劇場(旧キャセイホテル)現在は貸しビル
(昭和52年7月)

かせて夜毎「社会探訪」にも精を出したりと、まことに楽しいものであった。

またその頃、軍人や軍政要員の他に日本の商社も続々と乗り込んで来、それにつれて、軍にコネをつけた有名、無名の料亭も上陸してきた。立派な建物を手に入れ、タイル張りの床に畳を敷きつめ、コンクリートの壁を壊して床の間を作り、やがて芸者や仲居も三味線を抱えてやって来た。

その頃現地人の間でささやかれた。

「英国人は植民地を手に入れると、まず道路を整備した。フランス人は教会を建てた。スペイン人は金銀を持ち出した。そして日本人は男と女を持ち込んだ」と。

昭南占領直後の華僑対策

—華僑虐殺事件と献金問題—

華僑虐殺事件

大戦当時、華僑の総数は一、〇〇〇万人以上と称され、その九割はアジア地域に居住していた。マレー・シンガポール地区には、約一〇〇万人の華僑が在住しており、経済的には断然原住民を圧倒し、その実権を掌握していた。

この事件は、第二十五軍がシンガポール占領直後、抗日華僑や華僑義勇軍、共産黨員、抗日分子等を、検問により選別して、大量に虐殺したとする事件であるが、司馬

占領中の軍政に関する記録は、敗戦直後軍命令で一切焼却され、特にこの事件や強制献金問題に関することはすべてタブーとされ、日本側からは一切発表されていない。戦後の裁判で、日本側は犠牲者約六〇〇〇名と発表し、華僑側は四万名と主張している。

さて、第二十五軍は、昭和十七年二月十八日、突然、マレー半島およびシンガポールの島内反日華僑の肅清命令を発し、各街角に、軍司令官名で左記の布告を貼り出した。これは発刊したばかりの昭南新聞にも掲載され、市民はパニック状態になった。

布告

昭南島在住華僑十八歳以上五十歳までの男子は来る二月二十一日正午までに左の地区に集結すべし。

集合場所

アラブ街及びジャラン・ブッサト広場
リバリール路南端広場
カランとゲーラン交差点のゴム園
タンジョンバーカー警察附近
ハマレバー路及びチャンギー路交差点

右に違反する者は嚴重処罰さるべし。

尚各自は飲料水及び食糧を携行すべし。

大日本軍司令官

かくて各集合場所附近は、交通も遮断され、家に隠れていた者は、銃剣をつけた補助憲兵に狩り出されて連行された。こうして、島内約八〇万といわれた華僑の、約四分の一以上の壮年男子が、日本軍の銃剣の林の中に集められた。

また、憲兵隊本部が各分隊長に下達した命令は、次の如くであった。

検問実施命令

- 一、日時 二月十九、二十日の間に指定の区域に華僑を集合せしむ
二月二十一―二月二十三日の間検問を実施す
- 二、対象 華僑義勇軍、共産黨員、抗日分子、車慶獻金者、無頼漢、前科者等
- 三、資料 抗日団体名簿

しかし、二十数万名におよぶ多数を、僅か三日間の短期間に、言語も通せず、しかも地理も不案内の少数憲兵が、いかにして検問、選別するかは極めて困難なことであり、結局左のような実施要領を決定した。

- (1) 現地人を検問に利用すること

- (2) 名簿を基準とすること
(現地人警察官、密偵、義勇軍幹部等)
- (3) 病人を先に検問すること
(抗日団体名簿、探偵局、警察、救出邦人等の進言による名簿)
- (4) 共産黨員、義勇軍、ゲリラ党加盟者は特に嚴重に調査すること
- (5) 無頼漢、前科者等は、現地人の証言と、警察、刑務所の記録を参考にすること
- (6) 指定地域に集合した空家は、適宜検索すること
- 7 検問にパスした者には良民証を交付す

検問の要領は以下の如くであった、すなわち、検問所を三ヶ所つくり、

第一検問所には、覆面をした現地人協力者十数名を配し、検問者を一列にして通過

させ、協力者に該当者を指摘させ、

第二検問所では、指摘された者を列外に出し、別所で憲兵が調査をし、

第三検問所では、第二検問所を通過した者をさらに調査して、容疑者は列外に残し、

容疑のない者は「良民証」を交付して、解放したのである。

列外に残された容疑者は、さらに二十五日まで調べられたが、なにぶんにも、短時間の調査・検問であり、その正確な選別は至難であった。しかも現地人を利用しての検問のため、その個人的宿敵や恨みを受けていた者が不幸に遭ったことも当然考えられ、玉石混淆を避け得なかったことは事実とされている。

かくて、最後まで残された者は、数十台のトラックで運び出されたまま、永久に帰っては来なかったのである。

この人たちの運命は戦後の裁判で判明したが、袖助憲兵の手で、カトン海岸十一哩附近からチャンギ海岸、ボンゴール岬附近の海岸の砂浜に連れて行かれ、そこに穴を掘り、海に向けて座らせられて、背後から機銃掃射された後、穴の中に埋められたという。

また、タンジョンパーカーの港附近で検束された人たちは、両手を縛られ、膝で海上を曳航されて行き、ブ兰卡ンマター島の沖合で機銃掃射を浴びせられ、死体は海に投げ込まれた、と目撃者の印度人燈台看守が証言した。

（註、ブ兰卡ンマターとは、「死の後」との意で、現在はセントーサ島と改名され、レジヤセンターに変わっている）

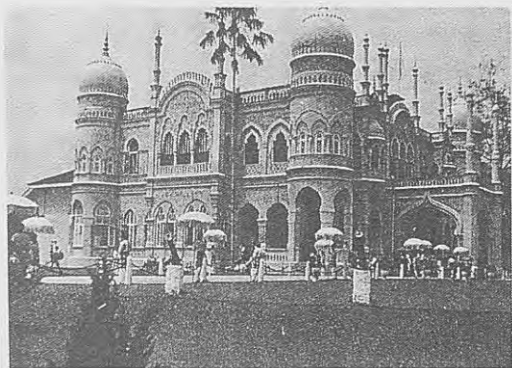
この暴虐、無分別な華僑虐待の発案者は、かの「潜行三千里」の著者、当時の作戦主任参謀辻政信中佐ともいわれ、また一説には、辻参謀と大石憲兵隊長との合作であるともいわれているが、要するに、軍首脳が部下強硬参謀の意見に押し切られた結果であろう。

とにかくこの事件は、日本軍の凶暴性、残忍性を露わす事件として非難を浴び、永久に消えない、痛恨きわまる事件であった。

しかし、戦争とはまったく悲惨である。お互いに殺し合いであり、戦場に於ける残虐行為は、敵味方の区別なく、常に行なわれる。

昭南のみに限らず、南京、満州に於いても、そしてまた、ドイツ軍に依る欧州でも、満州に於けるソ連軍によっても、広島・長崎に対する米軍によっても……、古今東西

限りなく行なわれてきたのである。
この残虐行為を生む戦争は、悪魔である。人類の戦争は永久に追放しなければなら
ない。



マライ・セランコール王宮

五〇〇〇万弗強制献金問題

昭南占領当初から、第二十五軍は華僑の領袖を軍政に協力させることを考慮し、前述の華僑検問の集結場で、特に大物二〇名ほどを残置、軟禁していた。その後

「華僑はかつて排日、抗日に終始したが、今や日本軍の保護の下にあり、自ら抗日を精算して過去をざんげする意味で、献金してその誠意を示せ」

との趣旨から、「華僑協会」を設立することとなり、軟禁中の大物を、軍政に協力することを条件として釈放した。

この協会は、軍政部の指導により、昭南およびマレー各州に急速に結成され、軍政部は直接指令して、献金を督促した。各州政庁は、警察や憲兵まで動員して、金集めを強行した。

献金割当額

昭南	一〇〇〇万弗
セランゴール州	一〇〇〇万弗
ペラ州	八〇〇万弗
ペナン	七〇〇万弗
マラッカ州	五五〇万弗
ジョホール州	五〇〇万弗
ネグリセンピラン州	一五〇万弗
パハン州	九〇万弗
ケランタン州	五〇万弗
トレンガヌ州	三〇万弗
ペリス州	二〇万弗
ケダ州	一〇〇万弗

各州の華僑協会は、査定した献金額を各人に割当てた。

昭南はどうか集まったが、その他の州ではなかなか集まらず、責任者は度々留置され、非協力者は逮捕、拷問され、至極苛酷であったという。

これが一般住民の反感と恨みをかい、また逃亡して反日・抗日に走った者も少なくなかったといわれる。特にペラ州の如きは、マレー半島最悪の治安不良地帯となり、抗日ゲリラの拠点、あるいは英軍潜入スパイの秘密上陸地点となった。

当時の日本軍の占領政策の一端を知る参考までに、極秘とされていた、昭和十七年四月十九日付、軍政部長渡辺渡大佐名で各州長官宛に発せられた、華僑対策要領を、つぎに掲載する。

華僑工作実施要領

華僑の動向に重大なる関心を持し、之が誘引工作を以て華僑対策の大部分なりとせるは既に過去のことに属す。

今次大戦の勃発を契機として、特に占領地内の華僑対策は、従来の誘引工作に比し、その本質、方向ともに根本的転換の必要を生ぜり。

即ちこの新たな事態に当りし、現地の情勢に即応して茲に華僑工作要領の大綱を決し、以て馬來統治上の重大存在たる彼等華僑に対する処理上遺憾なきを期せんとす。

二、要領

占領地内における彼等の動向は彼等自らをして決せしめ、服従を誓い協力を惜まざる者に対しては、その生業を奪はず、權益を認め、然らざる者に対しては断乎その生存を認めざるものとす。

各地区各部邑別に行ふ所謂献金勸説は、將來の華僑対策に重大なる支障を及ぼすを以て、一元の指令を以て巨額の撤出を命ずる時期までは、一切この種勸説を行はざるものとす。

自分の間華僑として特別の取扱をなさず、単に支那人として他民族と同一に取扱うものとす。

資力商権ともに他民族に優越せる現況下においては、治安維持、商店街の秩序等、勢い彼等の力

に負う所大なるべきを以て、この大勢に対しても、特別なる手段をとるの要を認めず。

第一期作戦終了直後には、馬來全体の華僑に対し軍費並に統治資金の調達を一元の指令を以て之を命ず。

シンガポールを中心として主要都市の有力華僑全体に対し、最低五千万弗の資金調達を命ずるものとす。

各商務会その他有力団体代表者及び有力者を募集せしめ、以て一面、日本の南方経営上の負担を軽からしめ、他面南方政策遂行上の実施者たらしむ。

協力に参加せざる者に対しては、極めて峻厳なる処断を以て処理す。即ち財産の没収、一族の追放、再入国の禁止を行ふと共に、反抗の徒に対しては極刑を以て之に答え華僑全体に対する動向決定に資せしむ。

日本に対する全面的協力を誓ふ者に対しては、従来の生業權益を奪はざるのみならず、彼等の繁榮につき充分なる補障を与へ、一般に布告して之が徹底を期す（以下略）

シンガポール日本人墓地と ひのもと地藏尊

最近では日本からの遺族や観光客の訪問も多くなったが、ここは市の北東部セラングリーンにあり、敷地面積三万三〇〇〇平方メートル、深緑の熱帯の木々に囲まれ、昭和三十九年から、現地日本人会の管理になり、手入れも行き届いている。

永い年月を経て、苔むし、名前も読みとれない、小さい哀れな「からゆきさん」たち数百人の墓、意外に立派なのは明治の文豪二葉亭四迷の碑、そして戦後戦犯としてチャンギー刑務所で処刑された、一三五人の「殉難烈士之碑」、ブキテマの丘にあった忠霊塔から運んできた、約一万柱の遺骨を納めた「陸海軍人軍属留魂の碑」、さら

に立派な「南方総軍司令官寺内寿一元帥之墓」等、一万数千柱の先人が静かに眠るこの墓地に詣でると、過去数百年におよぶ、この地と日本との深い係わり合いを偲ばずにはいられない。

「からゆきさん」は、周知のとおり、幕末の頃から明治、大正にかけて、主に九州西海岸の貧しい農漁村から東南アジア各地に売られてきた娘たちのことであり、シンガポールはその中心地であった。彼女たちのほとんどは、再び故郷の土を踏むこともなく、異郷で寂しく死んでいったが、明治十四年頃、在留日本人の成功者たちによって、彼女らの墓がこの地に建立された。

ロシア文学の大家二葉亭四迷は、明治四十一年五月、ロシアからの帰途、結核のため、インド洋上の船中で死去、遺体はシンガポールでだびに付され、墓碑は昭和四年になって、日本人会により建立されたという。

マレー作戦での陸海軍人軍属の戦没者約一万柱の英霊は、占領後ブキテマの丘に立派な忠霊塔が建設されて合祀されていたが、戦後ここから移し、この日本人墓地に「留

魂之碑」が設置された。もちろん、忠霊塔も昭南神社も、いまは跡かたもない。

南方総軍司令官寺内元帥は、終戦後サイゴン郊外で病臥していたところを、英軍司令官マウントバッテン将軍が同情して、ジョホールの知人宅に移して療養させていたが、その後同州レンガムの日本陸軍病院に移り昭和二十一年六月病没された。墓は正面人口から右側奥にある、高さ三メートル近いと思われる墓碑である。この墓は、捕虜となった日本軍将兵が、英軍監視の目をくぐりながら石を運び、兵器の部品で作ったノミで彫刻し、仕上げたものだということを聞き、強く感動した。

ひのもと地藏尊

日本人墓地の門を入れてすぐ左側に「ひのもと地藏尊」の石像が立っている。

シンガポール市の北、ジョホール海峡に面したジュロン地区には、戦後マレー、スマトラ各地からの、女性一五〇〇人を含む約一万人の同胞が集結、抑留されたが、食糧不足、栄養失調、マラリアなどで引揚げまでの間に四十数人が不届の客となった。

その遺体は近くに土葬されたが、その後、遺骨を集めてこの墓地に埋葬した。

この地藏尊は、前記ジュロン地区に抑留され、辛書をともしして引き揚げてきた人たちでつくっている「赤道会」(初代会長徳川義親氏、現在斉藤栄三郎氏)の会員たちにより建立されたもので、香川県産の味石を内地で彫刻し、神戸港から運び出して安置された。身の丈五尺五寸、台座ともで九尺の、見るからに美しい、慈愛にみちたお顔である。

シンガポールを訪れる人は、是非この日本人墓地と、ひのもと地藏尊にも詣でて戴きたいと思う。

懐しの故国へ

ジャワから帰って来たら調査室では、五人のタイピスト嬢たちがすでに新人と交替しており、庶務も海野氏が帰還し、新たに泉氏が着任していた。また流通班の渡辺睦男氏は、眼疾のためバダンの陸軍病院に入院していた。

私は急ぎジャワ出張の資料を整理し、報告書を提出して、ようやくホッとしたが、間もなく陸軍省から「参謀本部付を命ず」との帰還命令を受け取った。これは、かねて満鉄から陸軍省に対して、順次派遣社員の交替を申し入れていたことによるものであった。

十一月末、せつかく親しくなった多くの現地人とも別れ、住み馴れたバダンパンヂャ

ンを後にして、一年半前に上陸したパカンバルに一泊、シヤク河を降って昭南に帰り、昭南駅ホテルに投宿しながら、一〇日あまり飛行機待ちをした。この待機中に、数回空襲を受けたが幸い大した損害はなかった。

当時飛行機は軍の参謀や高級将校で満席となり、私ごとき若輩の民間人が割り込む余地はまったくなかったのだが、幸い南方航空に友人がいて、とりあえず台北行に便乗させてくれた。そのうえ、同社台北在勤の先輩（かつて私も昭南で面識があった）にも紹介状を書いてくれたのである。

途中サイゴンに寄ったが、偶然にも飛行場でバッタリ逢った陸軍大尉が、学生時代から親しかった二年先輩の野口氏（同氏卒業の際よく就職用の履歴書を代筆してあげた仲）で、聞けばここで気象班長をしているとのこと。その夜二人で、涼しいメコン河畔のレストランで飲んだビールの味は格別であった。

翌朝、前の日と同じ飛行機に乗るべく飛行場に行ったのだが、昨夜のビールの飲み過ぎのためか、下痢を起し、便所へかけ込んでの帰りの途中で、また偶然にも同氏に逢った。

「どうも澎湖島附近の気象状況が悪い」とのこと、「実は俺も下痢で弱っているよ」と言うのと、即座に「よし、今日は欠航にしよう」ということになり、かくてサイゴンに二泊することとなった。

翌日は下痢も回復して、大いに助かったが、先輩とは本当に有り難いものだと感謝したことであった。

東洋のバリと称された美しいサイゴンの街並、アオザイ姿のベトナム娘の華麗な姿などがいまでも眼に浮かんでくる。また、満鉄事務所を訪ねて、倉持所長、立川駐在員とも語り合い、懐しい一時を過し得たサイゴンであった。

かくて台北までは来たが、それから先がたいへんで、ここでもなかなか飛行機に乗せてはもらえないとのことであった。

私もここで歳を越すのかと覚悟していたのだが、昭南の友人が紹介してくれた先輩が、北投温泉に一泊招待してくれたり、「内地へ帰ったらもう食べられないゾー」というので台湾料理をご馳走してくれたりして、結構委屈もせず、一週間ほど待機した

だけで、東京行に乗せてもらえた。

羽田に帰り着いたのは、十九年十二月二十八日、午後四時すぎであった。

このときは、朝、台北を発ち、正午頃、福岡空港に到着、給油、昼食後再び飛び発つて、ちょうど頂上に純白の雪を戴く雄大な霊峰富士の景観に見とれていた時、突然、「只今東京に空襲警報が発令されました」との機内アナウンスがあり、機は箱根を越えたのち、熱海の海面スレスレのところまで高度を下げ、そのまま真鶴半島の突端を通過して、平塚の馬入川河口から内陸へ入った。

窓から斜め上空を見ると、約三〇〇メートル位高空に、銀色に輝く敵機三機が飛んでいる。

「ここまで来てやられてたまるか」と思わず叫んだとき

「間もなく羽田に着陸しますが、荷物はそのままにしてすぐ防空壕に退避して下さい」との再度の機内アナウンスがされて、機はまっすぐに羽田に突っ込んだ。

「やれやれ助かった」と、まさに実感で叫び、急いで降りて、まずは防空壕に飛び込んで、ひとまず避難をした。

幸い何ごともなく、約一時間ほどで退避は解除され、ここから日航のバスで、夕闇せまる懐しい東京の街を抜け、日比谷にある日航事務所まで送り届けてもらった。

羽田空港に着陸したとき、女子従業員数人が

「お帰りなさい、ご苦労様でした」

と走り寄ってきてくれたときは、久し振りに若い日本女性に日本語で迎えられて、「ああ、本当に日本に帰って来たんだナー」と、非常に嬉しかったことが、まるで

昨日のことに想い出される。



おわりに

今年を終戦満四〇年の節目ということで、例年にもまして平和への希求が盛んであった。同年輩の多くの友を戦争で失った世代の一人として、はかなく散った在天の友たちに改めて心からご冥福を祈りたい。

その後私も応召して満州の山中で迎えた終戦の日、そして遂にシベリヤへ送られ、多くの戦友が次から次と悲憤の涙を吞んで昇天していった姿、永い苦難の生活の後、辛うじて舞鶴の港に辿りついた日……走馬燈のように儼に浮んで来る。

戦争とは真に悲惨であり、悪魔である。絶対に再び繰り返してはならない。

以上随分「恥」を書いたが、まだまだ書きたいこと、調べねばならぬことが沢山あ

年表

太平洋戦争開戦からインドネシア独立まで



ベチャ

るのだが、病後の身体では根気が続かないので、この辺で筆を擱くことにした。ご寛容をお願いしたい。

終りにのぞみ、この小冊子の発行にご協力下さった(株)彩苑社代表取締役の杉本富美恵氏、友人海老原敏明氏に厚くお礼を申し上げたい。

昭和六十年十二月

川島 記

年表 (太平洋戦争開戦からインドネシア独立まで)

昭和 年月日 事項

- 16・12・8 太平洋戦争開戦
- 17・2・15 日本軍シンガポール占領
- 3・1 日本軍ジャワ島上陸
- 12 日本軍スマトラ島上陸
- 12・28 スマトラ島ベンクレーンに幽閉中のスカルノ氏を藤原機関が救出
- 12・28 満鉄調査団シンガポール到着
- 18・6 満鉄調査団、第二五軍司令部と共にスマトラ移駐
- 20・8・13 日本ボツタム宣言受諾終戦
- 17 インドネシアがジャカルタで独立宣言
- 9・8 連合軍先遣偵察隊メダンに落下傘降下
- 29 連合軍(英・蘭軍)ジャワ・スマトラに進駐
- 10・1 スラバヤでインドネシア民衆が日本軍武器を大量奪取

- 5 スマトラ島で独立政府発足
- 14 ジャワ島スマランで邦人百数十人殺害、日イ両軍衝突
- 11 スマトラ島シャンタルで蘭軍先遣部隊全滅
- 12・8 スマトラ島アチエ州各地で日本軍武器略奪さる
- 14 スマトラ島テピン市附近各地で日本軍人多数殺害さる
- 21・5 右地で日イ軍交戦
- 21・5 第二五軍司令部フキテンギからビンジャイに移駐
- 11・18 日本軍の送還終了し、英軍スマトラ島撤収
- 22・7・21 オランダ軍第一次攻勢開始
- 8・1 国連安全保障理事会が蘭・イ間停戦要求
- 8 インドとバキスタン独立
- 23・1 ビルマ独立
- 12 オランダ軍スカルノ氏らを逮捕、スマトラ島バラバットに幽閉
- 24・7・7 スカルノ氏ら釈放されジョクジャカルタに帰る
- 8・23 ハークでの講和会議にハッタ氏(後の副大統領)ら出席、和平協定成立
- 12・27 オランダの主権移譲でインドネシア共和国独立達成